



第68号  
平成19年(2007)  
7月18日発行  
(年4回発行)

## 紅葉マーク

青木秀樹

『猫養作品集十七』を上梓できたことは、猫養会の歴史にまた一步を刻んだこととして喜ばしいかぎりである。今号は歌仙ほか七十五巻の作品を収録できた。捌き作品各自一巻との制限があるので、七十五名の会員の方が作品を出されたことになる。ベテランの方で作品を提出されない方がこのところ増えていくのはいささか寂しい感じがするが、一方新しい捌き手が育っていることになる。これらアンソロジ―は捌き手が宗匠・ベテラン・新進・初心と連句への関わりに差があり、すべてが上出来の作品とはいえないが、これはやむをえないことである。作品を提出された各人にはそれなりの思いがある筈である。

東明雅先生が「これからの連句の復興・発展のためには捌き手の育成が急務である」と言われていたことが実現されていることは会

員各位の努力によるところである。明雅先生の警咳に接したことのない会員が今では会員の三分の一を占めており、これから明雅先生を知らない会員が増加することになる。先生の教えをいかに後進に伝えていくかが宗匠をはじめ先輩の責務である。

猫養会会員中心のグループ活動では、初心者にかなり早期から捌きの経験をさせていただいている。ある程度句作りができるようになると、連衆として場数を踏むだけでなく、捌きの立場から一巻を見渡す経験をする。だれでもはじめは下手である。座のマナーなどにも拘らずに先輩方から式目の障りなどのアドバイスが飛ぶ。そのような稽古を重ねて捌き手が育っていく。いまの猫養会は捌き手の数は多いが、次にその質が問題になってくる。

『猫養作品集十七』を贈呈した識者から、作品批評をいただくことがある。しつかり作品集に目を通していただいていることをありがたく思う。今回その中で「猫養の付けが甘くなっているのではないか」とのご批判をいただいた。要約すると、前句のイメージに重なるだけのイメージ付けが多いことと、前句の中の一語のみに着目した付けが多いことが指摘されている。前者はすでにイメージが重なっているために二句の間に余情が生まれないうこと、後者は七名八体で解釈すると二句の間に矛盾が生じることが問題視されている。具体例としてあげられた部分は確かに不出来

である。そのような指摘がベテラン捌きの作品に多かつたのは残念である。連句の基本である付けと転じについて基本に立ち返ってもう一度考えていただきたいと思う。

連句は創作過程が大切なのか、それとも出来上がった作品が大切なのかは、以前から論じられてきた。私は連句の楽しみは「連句の座の愉しさ」にあると思っているが、「よい作品」ができあがることで満足感が得られる。活字にして残る作品は、他者の目に触れ批評の対象になる。従って、活字にする作品はキズが少なく詩情の高い作品であることが望まれる。

車の運転に倣って、連句人を連句への取り組み姿勢で分けると、初心者は若葉マーク、新進とベテランで向上心のある方は青葉マーク、ベテランで現状にすっかり満足している方は紅葉マークということになる。

高齢化が進む中で、紅葉マークの方が増えることは当然のことと思う。気心の知れたメンバーで和気藹々と連句を楽しむことは、精神の若さを保つ優雅な趣味である。紅葉マークは本人の自覚がなくてもいつの間にか貼りついていく。明雅先生が掲げた連句三徳は「健康になる」「著録を防ぐ」「友達が増える」である。紅葉マークになる前に、連句の原点に立ち、もうひと踏ん張りして青葉マークの時間を長くしていただきたいと思う。

## 校合について

東 明雅

校合は①用字の検討。誤字・脱字・仮名遣の誤・片仮名の打越・発句同字・同字三句去り・一卷一字(春・夏・秋・冬・恋などの字は一卷に一度しか使わない)の検討から始まる。

②発句には切字が必要だし、脇は発句と同時間場所が原則であり、第三は胴切を嫌い、特別な止めの形がある。これらが守られているか。

③全巻にわたって、自・他・場が打越になつていないか、また稿(たとえば、自・自・場・場・他・他のような形)になつていないか、さらに内・外もたとえば、内・外・内・外というような展開はよろしくない。さらにかな止め・漢字止めがそれぞれ五句以上続かないようにする。

④月・花・恋。月花は定座にとられる必要はないが二花三月、それぞれ変化のある新しい句になっているか。恋も五句続ける時は一続きの恋になっていないか検討する。

⑤一卷に地(軽み)の部分と文(丈高い)の部分の配慮がなくて単調になつていないか等である。

ねこみの通信第四十九号より転載

校合というのは、一卷満尾した上で、捌き手が自ら添削することを言います。どのような細心に捌いても、出来上つて一卷全体を点検すると、思わぬところに差合や表現の重複を発見するもので、さらにそれだけでなく、一句一句も、それぞれ推敲することによってより完成された作品にすることが出来ます。

それはちやうど、大工が柱を削つた時、さらに磨きをかけて、小さい疵を消すようなもので、よく校合のできたものを「鉋目が取れた」などと申します。

俳諧(連句)は和歌や俳句と違い、一卷の作者は捌き手で、一卷の中の個々の句の作者は、捌き手に協力して、一卷の材料を提供しているのです。だから、一句一句の独自性を主張するよりは、一卷の完成に協力する方が大切で、一卷の完成の為ならば、捌きがいかにきびしい添削をしても、あるいは作者名を都合によつて変えようとも、連衆は甘受すべきであります。

このように作者の個性を軽く見るやり方は自我意識の強い近代人には素直に受け取られないでしょう。しかし、個より一座という衆の文芸である俳諧(連句)においては止むを得ない特質であると観念するより外はありません。

一座している時の作者はもちろん捌きと連衆ですが、出来上がった作品を校合するのは捌きなのです。

それ故、捌きは、作品の一句一句を添削・加筆する権限はもちろんのこと、都合によっては、句を差しかえ、また作者名を変更することも出来ます。

「文台引き下ろせば即反故也」とは、土芳の「三冊子」に出ている芭蕉の語です。

しかし、この「座の文学」としてだけの連句がすべてかと思うと、そうばかりとも言えないので、これほど激しい言葉を吐いた芭蕉自身、決して使用ずみの懐紙を反故として破つたり、棄てたりせず、筆を加えて推敲・添削し、また、その作品を弟子たちが出版することも拒もうとしませんでした。これは座を離れた一つの文学作品としても俳諧を認める立場を取つていたもので、私どもも、一座の楽しみは楽しみとして、さらに、それを校合して、よりよい作品を残すようにしている次第です。これは連句という芸術に座の性格としての特性と、書かれた文学としての性格が共存している為です。

ねこみの通信第十二号、第二十号より転載

## 芭蕉「さみだれ」句考

### 山本陽史

芭蕉の『おくのほそ道』の

さみだれをあつめて早し最上川

の句は、よく知られているように大石田で巻かれた四吟歌仙の発句

さみだれをあつめて涼し最上川

を改案したものである。芭蕉がこの歌仙を巻いたのは元禄二年五月二十九日から三十日（旧曆）にかけてのことで、相手は旅の同行者の河合曾良、大石田の俳人高桑川水・高野一栄であった。「涼し」は地元の俳人に対する「挨拶」の意味を込めている。夏のもてなしは客を涼しくさせることが何よりも肝要であろうし、それに対して客はお礼を述べる必要がある。「涼し」はそういう意味では定番の表現であると言えよう。となると、この句の勘所というか、芭蕉ならではの、という部分はどこにあると考えればいいのかだろうか。

それを考える前に、この句が詠まれた前後を少し見てみよう。

芭蕉はその直前に、尾花沢における五吟歌仙でも

涼しさをわが宿にしてねまるなり

と詠んでいる。この句は「ねまる」（薬に座る、と言う意味、関東風の意味「寝そべる」と解する向きもあるが疑問）という地元の方言を使ったことが手柄であろう。おそらく地

元の俳人たちは微笑をもつて芭蕉の心遣いに感じ入ったことであろう。

また、六月十四日の酒田における七吟歌仙の発句でも

涼しさを海に入れたる最上川

と、やはり「涼し」を使った挨拶を行っている。ただしこの句は『おくのほそ道』では

暑き日を海に入れたり最上川

と改案されている。『おくのほそ道』の中に入れてみると、「涼し」をそのまま使った場合、「海に入れたる」とのつながりが悪く、躊躇されたのであろう。

他にも「涼し」という表現は使われていなくとも、涼しいもてなしを感謝したと解し得る句がこの前後にいくつか詠まれている。

新庄での歌仙の発句二つ（『おくのほそ道』には収録されていない）。

水の奥氷室尋ぬる柳哉

風の香も南に近し最上川

羽黒山での歌仙の発句。

有難や雪をかをらす風の音（『おくのほそ道』では下五が「南谷」と改められている）

さらに、もてなしを受けた羽黒山の別当代会覚の求めに応じて出羽三山を詠んだ句のうち、羽黒山を詠んだ句。

涼風やほの三日月の羽黒山（『おくのほそ道』では上五を「涼しさ」としている）

繰り返しになるが、夏の挨拶としては「涼し」さを強調することが決まったパターンと

なっているのであり、芭蕉は律儀にそれを守っているわけである。

さて、「さみだれ」句であるが、俳文学者松尾真知子氏によれば、和歌の伝統では「集める」は「雪」「蛍」「歌」などに使う表現であったという。芭蕉はその「集める」という言葉を「五月雨」に使ったところが新しいのだということである。つまり、「さみだれをあつめる」という取り合わせが新しいのだという。そうだとすれば、例の

古池や蛙飛び込む水の音

で、和歌の伝統では「鳴く」ものであった「蛙」を池に飛び込ませたことで新しさを出した手法が想起される。芭蕉は伝統的な和歌文学の約束事や固定観念に支配されてきた俳諧を、新しい形に変えていくことを目標としていたのである。

芭蕉は大石田の歌仙について「わりなき一巻残しぬ」と述べている。やや詳しく芭蕉の言説を紹介すると、この地域では「古き俳諧のたね」が落ちこぼれて、「此道にさぐり足して、新古二道に踏み迷ふ」状況であったが、そこで「道しるべ」をする人がいなければならぬだろうと思つて、やむを得ず歌仙を巻いたということである。芭蕉は「このたびの風流ここに至れり」と記している。

『おくのほそ道』の中でも特にこの記述は、具体的な意味が判然とせず、さまざまな解釈が以前より行われてきたところであるが、芭

蕉以前の「古き俳諧」すなわち談林俳諧の影響を強く残したこの地域の俳人たちに対し、芭蕉はともに歌仙を巻くことによって「蕉風」の新し味を示そうとしたのであろう。その体験は『おくのほそ道』の中でもっとも思いで深く、意義を感じた俳句であったわけである。ということを考え合わせると、芭蕉は発句で地元の俳人に対する挨拶を当然込めるとともに、今後の「道しるべ」となるべき新しさを示す必要があったはずである。それが「さみだれ」を「あつめ」という新しい取り合わせであったのではないだろうか。「古き俳諧」に染まってきた人ほど、この取り合わせの妙に度胆を抜かれたことは十分考えられる。次に、「涼し」を「早し」と改めた理由について考えてみたい。

まず、どうやら「涼し」を芭蕉はそれほど重視してはいなかったからと思われる。

次に、全体の構成からの観点である。この句の前後、尾花沢と羽黒の句で「涼し」を使っており、同じような表現が何度も出てくるのを避けたことが考えられる。

そして最も大きな理由は、『おくのほそ道』に収めるに当たって、この句が最上川舟下りについて記した記述の後に配置されていることが影響を与えたのであろう。「おそろしき

難所」「水みなぎつて舟危ふし」というような緊迫した文の後に、「涼し」という、どちらかといえば気楽な印象の話が入った句を置くことには違和感があるはずである。緊迫した状況を象徴する句にするためにはどうあらためれば良いか。それが「涼し」を「早し」に変えることであつたのであろう。つまり芭蕉は連句の発句の持つ挨拶性をここでは捨て去っているわけである。

ではなぜ「早し」なのか。これについてはかつては舟で最上川を下つた実感を詠んだものと考えられてきたが、現在は最上川が「早川」であるという歌枕の「本意」（その歌枕の持つ本質）に則つたものとする説が通説になっている。

周知のように會良の旅日記と『おくのほそ道』本文との比較研究が戦後進展するにつれて、旅の事実と『おくのほそ道』の記述にしばしば食い違いが見られることがわかつてきた。つまり『おくのほそ道』は旅のドキュメントラリーではなく、旅を元に組み立てられた創作、小説のようなものである。であるから、単純に「早し」を旅の実感と解することはできないのである。

最上川についてはたとえば『名所方角抄』という書物には「最上川、早川也」とある。

また、『徒然草』の吉田兼好の

最上川はやくぞまさるあまぐものほればくだる五月雨のころ（『兼好法師集』）

を芭蕉が意識していた可能性もある。興味深いことにこの歌には「最上川」「はやく」

「五月雨」と、芭蕉の句を構成する要素が三つ含まれている。仮に芭蕉がこの句を意識していたとしても剽窃とするには当たらない。伝統的な歌枕の世界をふまえることは古典文学の常套手段だからである。ところが、こじつけめくが、唯一無い要素が「あつめて」であり、やはりこの語が芭蕉俳諧の新しき、独创性を示すものであろうかと思われる。

#### 執筆者紹介

山形大学大学院理工学研究科教授。日本近世文学・文化論。近著に『江戸見立本の研究』。山寺芭蕉記念館運営懇談会委員、山形県世界遺産（「出羽三山」と最上川が織りなす文化的景観）育成学術研究員。

日本アマチュアブラサンサンプル代表・日本トランペット協会常任理事・聖パレンタインプラスアンサンプル（SUBETランペット奏者）

猫養会平成十九年正式俳諧配役

第二十一回藤祭り奉納  
俳諧の連歌二十韻

宗匠	倉本 路子
脇宗匠	青木 秀樹
副宗匠	高橋 豊美
執筆	松本 碧
知司	根津 忠史
副知司	横山 わこ
座配	松原 弘子
座見	内田 遊民
花司	武井 雅子
香元	遠藤 央子
配硯	佐々木有子
同	松島アンズ
同	西田 一枝
老長	原田 千町

(実技指導 臥猫庵千町宗匠)

反橋に小宇宙あり藤祭	秀樹
逍遙の径亀の鳴く声	雅子
ベレー帽カンバスに春描くらん	千町
父親譲り箸の持ち方	忠史
寒の月ここは飛驒との国境	央子
温泉宿で毛糸編む女	豊美
絡まって離れられない離さない	有子
悪態をつく恋のあそびは	わこ
ととんと階段箆筒昇り降り	遊民
骨董店に住みつきし猫	一枝
ナオ梅雨曇り借りた鬘をちよいと脱ぐ	あや
マスクメロンの出来ばえを見に	かりん
たわわなる胸を両手で揺すり上げ	千恵子
愛の賛歌のひびき爽やか	常義
ノートルダム聖者の像に月の髣	アンズ
リハビリがてら木の実拾ひに	弘子
ナウ大吟醸五臓六腑をよるこぼす	やすこ
平行線もやつと交はり	鐵男
岩割りて咲くてふ花を尋めゆかむ	路子
オオムラサキのとびたてる朝	執筆

執筆を終えて

松本 碧

明雅先生は、執筆の作法を習いに伊那の、芦丈先生を度々訪ね、芦丈先生は、病の身をかえりみず、時には起きあがって文台捌きなどの型を示されたと、『古松新濤』（別所真紀子著）に書かれている。

このような苦勞を重ねて会得された所作や作法を、明雅先生は『正式俳諧興行次第』として残された。手書きで、さし絵まで添えられている。そのコピー（A4版六頁）が送られてきた時、全身に緊張が走った。私などに出来るだろうか、と自問せずにおれなかつた。バッグに入れて持ち歩き、電車の中で詰じたりしたが、不安だった。身体におぼえ込ませなければ、作法は決して身につくまい。稽古の日の先生を思い出した。台本を手にして走り回る舞台監督のようだった。しかし口をきかれたことはほとんどない。弟子が身体で会得するのを求められたのだ。

懐紙を文台上では折らず、捧げて折る練習をしていたある日、これはお茶の袱紗捌きに似ていると思つた。お辞儀にも、歩き方にも茶道が流れこんでいる。そして、華道や香道も。『道』と名の付く中世の芸ごとが、この興行として花開いたに違いない。

明雅先生が正式俳諧興行を、どれほど大切にされていたか、執筆をさせていただくまで気付かずにいたのが恥しい。

みなさま、ありがとうございます。

二十韻 「春雷や」

内田麻子

春雷や心新たに向ふ道

麻子

太鼓どどんと揺るる藤房

一枝

着地点探せる蝶がまつはりて

蓉子

フレーバーティーをゆつくりと淹れ

政志

月の石フオトモンタージュ入賞す

あや

由布姫迷ふ霧の湖

蓉

さよならは濁酒呷りやつと言ひ

枝

降りたい駅をすぎる急行

や

通販でみんな間に合ふ釘・ベッド

蓉

雪暁にふつて残らず

麻

ナオ手袋を脱ぎかけてをり医学生

や

けたたましくも救急車ゆく

志

パレスチナ平和の鳩を願ふ人

枝

長い回廊薄陽さす恋

や

逢引は麦畑にて君と月

志

メロン半切りふたり暮しに

蓉

ナリ能面のさまざま彫りし五十年

志

大き扁壺に水を差し入れ

枝

根継ぎして甦りたる夢の花

蓉

卯建に影の伸びてうららか

や

二十韻 「昔公像」

原田千町 捌

昔公像藤の香りをまとひけり

千町

琴弾鳥の響き来る苑

郁子

上り築豊漁といふ知らせ来て

たつみ

主自慢の染付の皿

達子

窯跡の涼しき月は中五日

紅舟

帰省の彼の浴衣まぶしく

た

嬉しくも習ふギターの指の触れ

郁

もたれ合ひたる棚の人形

達

永年の銭湯つひに駐車場

同

おけらで戻る道がわびしい

た

ナオ連山に色とりどりのスキーヤー

郁

暖炉ばちばち音たてて燃ゆ

舟

酒ならば任せておくと長談義

郁

振向きさまに唇を盗まれ

達

けふはもう泊まるつもりで月の宿

た

ここもかしこも虫のすだける

舟

ナリそぞろ寒どこへ行つたかおしらさま

達

カーナビまかせ団体のバス

た

二の丸は舞へや歌への花の宴

郁

蝶ふうはりと越える山脈

た

二十韻 「付けと一声」

本庄良子 捌

俳諧の付けと一声藤祭

良子

鳴くを忘るる神城の亀

利子

ウインドウ春のシヨールを選ぶらん

わこ

将棋ソフトとやつと引き分け

士朗

山眠る為すこともなき月の基地

豊美

「わたしはかもめ」着ぶくれて笑む

豊

両の手に余りし胸の豊かさよ

良

嬉し涙か哀し涙か

利

来迎の雲から降りて夢醒むる

士

博物館の国宝の壺

わ

ナオ鬼殺してふ冷酒を呑み回し

士

すすすすく育て菖蒲打ちして

豊

どこへ飛ぶ將軍さまの核鉄砲

士

喜び組へTバック許可

豊

残月の後朝またも抱き合ひ

利

地震に揺れある棚のへうたん

士

ナウ兄上はつひに戻らず終戦忌

豊

シヨールペンハウアー座右に置く父

良

幾台も連ねる花の車椅子

わ

春雪を踏む馬のたくあし

豊

連衆 西田一枝 五味蓉子 峯田政志

中村あや

連衆 東 郁子 山寺たつみ 篠原達子

筒井紅舟

連衆 梅田利子 横山わこ 横井士朗

高橋豊美

二十韻 「池の藤」 近藤守男 捌

人騒や亀石となる池の藤

柔東風通ふ赤き反橋

寶貝敷物作り飾りゐて

講習会はデーマ省エネ

摩天楼影凸凹に月涼し

下着代りの香水も空

僕の眼は君の前では盲です

一汁一菜健康によい

印度では二桁掛算すらすらと

MVPを取りし俊輔

ナオデカントにワインを移し年惜しむ

偽ブランドも気にしない姉

五線紙に告白めいた曲書いて

深情なり男装のひと

月昇る雁の腹摺る山の上

足湯に浸かる駅のややや寒

ナオガートラでお神輿運ぶ秋祭

滅多に吠えぬ父の老犬

咲き満つる花に生命の力享け

麓に向けて棚田耕す

※ガートラ耕運機兼トラック

連衆 佐々木有子 橋 文子 根津忠史

山本要子

二十韻 「白藤」 久保田鷹子 捌

白藤の揺れぬひとときありにけり

徂春の水の映す階

囀を聞きつつ稿の仕上がりて

無沙汰詫びる名物の菓子

泳ぎ手の息継ぐたびに月を見る

裸身の人魚めいて青蚊帳

ほつれたる糸をほぐして元の鞘

キムジョンイルの離さない核

泣き羅漢怒り羅漢は山裾に

あかつき方の夢のほのぼの

ナオ北風に向かひ差し足四コーナー

厚着同士の酌み交す酒

曲屋に座敷童子が出没し

蚯蚓鳴かせてハニーダーリン

人妻を攫つて月のジョージアへ

楳桴の香の甘く酸っぱく

ナウしみじみとただ偲びる平家琵琶

左右の耳に消えぬ面擦

花の下蒔絵の重でもてなされ

土に滲みゆく暖かな雨

連衆 鈴木了斎 副島久美子 伊藤孝司

松本 碧

二十韻 「風のかたち」 遠藤央子 捌

風あれば風のかたちに藤の揺れ

おたまじゃくしのたてる漣 やすこ

もてなしの菜飯いろよく仕上がりて

志世子

ほめればつぎに謡ひと節

吉文

月寒くテレビクルーは帰りゆく

秀樹

マッフのなかも手をつなぐ仲

逢引のちよつと気にする道祖神

阿呆阿呆と鳥啼く枝

夕暮れはわかちやあるけど又はし

指でさぐつて小銭じやらじやら

同 や

ナオふたりの子ホームステイはイギリスへ

エンゼルフィッシュひかる水槽

戦場の野宮で見たる夢美人

君とつむいだ愛の十年

銀に蛇行の大河月上ぐる

地芝居果てて静寂なる里

ナウどぶろくを酌んで国政論し合ひ

アスリートらは北京目させる

花の雲港のみえる丘つつむ

仔猫を抱いてのぞく豆腐屋

連衆 池田やすこ 秋山志世子 永田吉文

青木秀樹

二十韻 「運河の町」 生田昌義

豆菓子や運河の町は藤祭

常義

笙篳篥の調べ長閑し

孝子

春興に漢字クイズのきりもなし

佳之子

ミステリーツアー流行るこのごろ

節子

出資者になると解説月寒く

鐵男

枯野を渡る大寺の鐘

節

司法試験通るまではと待つ女

孝

ホテルを出れば光るフラッシュ

之

核兵器持ったが勝ちとちらつかせ

男

竜に跨る少年の夢

孝

ナオ 額寄せあれこれ悩む村おこし

男

焼酎沁みる愛のお仕置

孝

掛香の垂るる几帳に入り得ず

之

天守閣にも物の音の澄む

節

高速道いざよふ月の昇り来て

之

弥猛心に弾む初獵

孝

ナリ 教育の改革叫ぶ総理殿

節

節介ゴルフ傘でいろいろ

常

花吹雪渦絢爛と奈落まで

孝

手品師の出す黄蝶白蝶

節

連衆 坂本孝子 染谷佳之 長坂節子

林 鐵男

二十韻 「古代紫」 鈴木千恵子 捌

古代紫今紫に藤の房

千恵子

春惜しみつつ歩く池端

好敏

山笑ふ修士論文書き終へて

雅子

耳をひっぱる癖は変わらず

暢子

ウーダービーを親子で語る月のカフェ

恭子

元彼といつもどこかで比べてる

恭

掃宅の部長のぞくスーパード

暢

酔ひの深まる炬燵での酒

敏

ウオーキングローゼットは二十畳

恭

ナオ 定置網氷見の鱈漁見とどけに

雅

出生率を上げる政策

同

早慶戦王子王子と手を振って

恭

惚れてしまへば証文も反故

敏

笑ひ茸月の光のふりそそぎ

雅

フェアリーたちの踊るうそ寒

千

ナリ 遅れ蚊を追ってぶつかる自動ドア

恭

額を撫でる白髪の爺

暢

花愛づる異国の人等にぎやかに

敏

行ったり来たりふらここの影

暢

連衆 豊田好敏 武井雅子 船水暢子

式田恭子

二十韻 「太鼓橋」 梅田 實 捌

太鼓橋三代渡る藤祭

實

風船を手に記念撮影

ジョウ

猫の子のじつと見てゐる縁先に

ゆみを

ビニール製の箒塵取

かりん

ウ 反故にする原稿あまた月冴ゆる

弘子

教え目にして嫁きしひと恋ひ

を

肩を抱きフロアに誘ふ兄の妻

弘

解体作業止んだお隣

弘

小説家とは政治家の謂ひならん

を

健忘症で二枚舌なる

弘

ナオ 筒梅雨降り続くなか不意の客

弘

銭勘定が俺の役割

を

めげないでデージー・命のギャッツビー

弘

紅葉の宿に肌を寄せ合ひ

弘

月影に「旅愁」を低く歌ひ上げ

を

コンピューターに勝るべし独楽

弘

ナリ 五十年振りに同期の友と飲む

を

不老食にて特許取る夢

實

天主堂の窓絵離れぬ花の蕊

弘

清明の朝けぶる山脈

弘

連衆 林ジョウ 青島ゆみを 登坂かりん

松原弘子



二十韻 「宮の藤」 内田遊民 捌

桃径庵和子宗匠七回忌追善興行献句

常しなへ菅丞相の宮の藤 遊民

百千鳥啼く撫で牛の背 曉巳

野遊びの打ち合はせなどメールにて 泉子

ブレンドの味マスターの技 淳子

全視界めがね外せば渡る月 アンズ

稲妻こはいひしと抱きつく 巳

行く秋の別れの唇のひやつこくて 淳

リベルタンゴは幕間に鳴る 泉

群れなして美しく可憐にクリオネは 淳

幼稚園児の止まる信号 巳

ナオ注文の名物水菓宅配便 ア

電子マネーは貯金出来ない 同

冬將軍月下に尾錠ちゅつと締め 泉

爛熟くして帰る人待つ 淳

良縁は東司掃除に励む娘に ア

バージョンアップしたる遺伝子 泉

ナリエッシャーの騙し絵の水ぐるぐると 巳

山手線はけふも無事故で ア

姫虹の耳朶にささやく花筵 淳

夢遙かなる連風の空 泉

連衆 島村曉巳 青木泉子 上月淳子

松島アンズ

佛は古拙の微笑風薫る 青木泉子

はつ夏の風戯るる千社札 青木秀樹

風かをる垣見えて来し桃径庵 秋山志世子

七重八重薔薇に集ふも縁かな 浅賀丁那

声涼し竹百幹を前にして 穴澤篤子

ふりかへる昨日筍今日のたけ 石原英一

薫風に佳き佛の揺るるなり 磯 直道

眼うらに残る笑顔やひやし酒 市野沢弘子

翡翠や江戸の肴と江戸の酒 伊藤哲子

薔薇垣によれば面輪のなつかしき 今村 苗

新樹光君がよはひを過ぎて生く 内田麻子

新緑や紫煙のび行く一筋に 梅田 實

老松の艶のかそけさつき風 遠藤央子

糸竹の縁にあれば涼しうて 大窪瑞枝

聖五月語り継がれる武勇伝 大島洋子

緑立つポートレートのにこやかに 大津博山

思ひ出のいとど身に添ふ薄暑かな 狩野康子

初夏や桃径いまもひたに行く 川名将義

師を偲び集へる顔に夏の風 北村良輔

桃径のすがしき余香常しなへ 木村真呂

まなうらに今もつづれの単衣帯 倉本路子

浅酌やきりきりしやんと単帯 小林しげと

老いてなほ若葉のやうな人なりし 小林静司

花は葉に笑みを湛へて値切る鯛 近藤守男

新緑や母子二代の美しく 佐藤順子

文机に寄りて紫煙の薄暑かな 式田恭子

桃の花見るとび思ふ師の姿 渋谷千鶴子

夏燕桃径庵の付け轉じ 島村曉巳

こちらもいひ茅花ながしの中の声 杉山壽子

白牡丹今年も白く咲き初むる 鈴木千恵子

牡丹やまた咲き満ちて七回忌 鈴木美奈子

新緑を映す懐紙の余白かな 鈴木了齋

佛や梅雨の走りの傘かしげ 副島久美子

桃咲けば面影いよよお慕はしく 高瀬美保

観自在風駆けめぐる五月哉 高橋豊美

魂来ませはや七とせの若葉かな 橘 文子

夏衣きりと帯の笑顔かな 棚町未悠

瘦身にふはりとりのりし夏羽織 土屋実朗

初盤新三役者に類染めん 中川 哲

きりきりと細き煙草や単帯 中川 凡

豆飯のほかほか握る細き指 中川真紀子

羅のうしろすがたのとこしなへ 永島靖子

和やかな風の香とほる径かな 永田吉文

そら耳ではないかも知れぬ余花の闇 中林あや

冷酒の肴は何にしませうか 中村ふみ

万緑の句会にいたたく緑かな 西田一枝

古団扇の風より早き付け句かな 登坂かりん

我が書棚「老いの楽しみ」並ぶ夏 間佐紀子

夏座敷桃径庵の七回忌 花巻珠枝

於母影を風のせ来る五月かな 林 鐵男

美しきひと偲び舞ふらん夏の蝶 広田 遊

俳諧に酒の座のあり時鳥 佛淵健悟

表星のしるべ瞬く行く手かな 松島アンズ

鉄壁の三遊間をぬけし蝶あやは 松本 碧

七年の刻も感ぜずあいの風 三浦悟朗

卯の花や笑顔ほのぼの名付け親 峯田政志

新緑に水木の花のまぎれなし 宮下太郎

母の日や背にやさしき千の風 本屋良子

豆飯のほるとこぼれし薄暮かな 山口美恵

老い支度友と語らふ豆御飯 山田美代子

げんげ田の遠き広がり日矢の射す 山本要子

継ぎし畑広がる麦の穂波かな 横井士郎

新緑や師の声を聞く本を手に 横橋風齋

歌仙 「薫風」 磯直道 捌

薫風に佳き面影の揺るるなり 磯直道

筍飯の炊き上る頃 島村暁巳

新しき白きエプロン身につけて 橋文子

料紙にのこす淡墨のかな 佐古英子

良き名よりよきなりわいを選ぶ月 西田一枝

鈴虫ちりり和する子の籠 西田一枝

聞き惚れるサーカス口上爽かに 西田一枝

何気なさそに近寄せる腰 西田一枝

せつかくとばかりにぐいと抱きしめて 西田一枝

インマイポケット新札の束 西田一枝

政界と庶民と何かすれちがい 西田一枝

伊東名物烏賊の鳶口 西田一枝

月涼し潮の香りの湯に銘酒

床大理石エステ優しく

帝国の列柱遺跡よぎる鳥

座の文芸を王は知らずや

花筵ボケとツツコミ軽妙に

倒立のまま現るる佐保姫

ナオ血統書つきで誕生春の駒

耕運機には二女の婿殿

バツイチと知ってる人は知っている

あぶりだしにて書いた付け文

お役所の屑籠にある飯の種

凍蝶となり鳴かず飛ばずに

Q10は胼あかぎれに効きますか

お父上様 お母上様

メンデルは豆のおかげで大学者

螺旋階段伝い聖堂

八尾町しみじみと月崇めつつ

松茸の椀老舗なる味

ナリ亡き人もさぞお喜び秋うらら

千の空気を受ける掌

油彩描く仇名で呼びし故郷の山

暖かきまままどろみの夢

花を追ひ万葉の花にめぐりあう

お玉杓子の遊ぶ小流れ

あつという間に六年が

たちました。無我夢中でふつと気がついたら

六年がたっていたという思いです。母は心か

ら連句を愛し、また賑やかなことが大好きで

した。母が元気だったらきつと喜んでくれる

のかしらと、追善興行を計画しました。

当日はみなさまのあたたかい言葉を頂き、

写真の母は本当に喜んでいただけにちがひありま

せん。母の楽しそうな声が聞こえるようで胸

がいつぱいでした。お忙しい中お出かけ頂き

ましたみなさまに心より感謝しております。

また母へお句を頂戴し、有り難うございまし

た。当日のみなさまの作品とともに大切な宝

物になりました。これからも母の連句への情

熱を引き継いで精進してまいりますので、よ

ろしくご指導のほどお願いいたします。

母のことを思い出して下さいました折には、

お話などお聞かせ下さいませ。

式田恭子

## 猫養会ホームページについて

島村暁巳

猫養ホームページは平成十二年四月に呱呱の声をあげ、その年十二月発行の猫養通信四十一号に明雅先生が「IT時代と連句」という一文を載せておられます。

誕生に当たっては井上鶴鳴、蘭石夫妻が解説の任に当たられその後の運営もお願いして参りました。

以後かなりの日時も経ち、夫妻からもそろそろ後任を選んで欲しい旨のお申し出がありかつ内容の再検討を行う時期と判断いたしました。

そこで横井士郎さんに新担当者として白羽の矢を立て就任を快諾して頂きました。

担当者の変更にともないリニューアル案も横井さんにご提案頂き理事会で検討を行って決定致しました。

新しいホームページは今秋に立ちあげる予定で作成中です。内容としては現ホームページに主として二つのことを加えます。

第一は会員のための資料庫として「季刊連句」全号、「ねこみの通信」全号、「芦丈翁俳諧聞書」等々の文書を収載することです。

第二は会内の連句実作グループを紹介することです。

この新装なったホームページにより一層充実した会の紹介を行うことにより新会員が増加し会の知名度が増すことを期待していますし、会の貴重な資料がアーカイブスとして保存され会員全員に活用されていけば会の発展に大いに寄与する、と期待しています。

### 〔後記〕

一、ホームページに記載を希望する連句実作グループをご連絡下さい。

二、ホームページからのリンクを希望する個人

人のウェブサイト(連句に関するもの)をご連絡下さい。

ご連絡を頂きましたら内容に付きお打合わせをさせて頂いた上でお手続きをいたします。

本件についてのご連絡、ご意見、ご照会は島村暁巳宛にお願いいたします。(なるべくファックス、メールをご利用ください)。

なお、ホームページは秋の完成を目指し日々作成中ですが、ご関心のある方はその構築現場である「テスト版」を覗くことができます。URLは左記です。(とりあえず某団体のホームページの隅に間借りしています。完成後は独自のURLを取得します)

「会員のページ」に入るためのパスワードは「meiga」です。

<http://harmony.cool.ne.jp/nekoindex.html>

ご覧の上ご意見があれば横井士郎さん  
Ashiro@yokoi.com  
宛にメールを下さい。

以上

事務局便り

◇猫養会例会

芭蕉忌正式俳諧興行及び・

明雅忌追善連句会

日 平成十九年十月十七日(水曜日)

時 十一時より十七時(受付十時半より)

場所 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一六―三

電話03―3631―1448

芭蕉忌正式俳諧終了後明雅忌追善連句会

(明雅先生の発句による脇起り二十韻)

◇新会員紹介

永田吉文 東京都町田市在住

古藤 瞳 東京都多摩市在住

◇猫養基金にご協力有難うございました。

山寺たつみ様 一万円

根津 忠史様 三千元

松本 碧様 一万円

神楽坂連句会様 二万円

源心庵の会様 二万円

朱鷺の会 橘文子様 一万円

基金口座 みずほ銀行 新宿新都心支店

猫養基金 普通3376045

◇猫養作品集第十七号およびバックナンバー

ご入用の方は、左記にお申し込み下さい。

☎20210012

西東京市東町4―4―28 鈴木千恵子

☎0424―23―7817

◇平成十九年度正式俳諧配役

宗 匠 橘 文子

脇宗匠 近藤守男

副宗匠 久保田庸子

執筆 鈴木千恵子

知 司 鈴木了斎

副知司 武井雅子

花 司 横山わこ

香 元 秋山志世子

座 配 遠藤 央子

座 見 永田吉文

配 硯 棚町未悠

全 内田遊民

老 長 原田千町

訃報

六月二十八日会員の佐藤良彌様・元会員の

村田富美様が亡くなられました。

謹んでご冥福をお祈り致します。

◇平成十九年の第二十二回国民文化祭

文芸祭連句大会は

平成十九年十一月二日(金)

十一月三日(土)

徳島県徳島市で開催されます。

◇猫養会年会費納入口座

みずほ銀行 新宿新都心支店

普通 3376088

季刊 『猫養通信』第六十八号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二―二―十六

編集 猫養通信編集部